

隨想 すいそう —



と悔しく、情けなかった。
数日後、財布は見つかった。机の引き出しなどに入れておいて無くなつては困ると思い、別の所に保管したのをすっかり忘れてしまつたのである。

「先生がしまい忘れたのに、みんなを疑つたりして本当にすまなかつた。悪い先生。だから、先生をたたいてちょい先生。だから、先生をたたいてちょいだい」といつて、いすに座つた。

困つた様子の子どもたちの中から、「いいよ、先生」という声も聞こえた時、T子は立ち上がりつたのである。乱暴な言動も見られ、私に叱られることがもあつたT子は、いきなり私の背後に回ると、とんとんとんと優しく肩をたたいてくれたのである。教室には、笑いと拍手がわき起つた。

「人を許す。思いやる」などと百言を語るより、T子の肩たたきははるかに強い説得力で、子どもたちの心の奥を深く浸透したにちがいない。

私もまた、この一件から、実に大きな多くのものを学ばされた。この教訓を深く受け止めて、それ以来、教師として生きる糧としながら、子どもたちにも豊かに返してやれるよう努めるようしている。

(いわき市立錦小学校教諭)

T子の機転

島 廣 子



起こりは、N男が二百五十円ばかり入った財布を拾つて、届けてくれたことに始まる。私は、N男の正直な行為を学級のみんなに紹介し、土曜日のテレビ朝会の時、全校に向けて落とし主を尋ねてもらうこととした。すでに授業が始まっていたので、終わつたら週番の先生に届けようと思い、何気なく財布をしまつた。授業を続いているうちに、いつか財布のことは忘れてしまつていた。

土曜日の朝になつて財布のことを思い出し、放映してもらおうとした財布が無い。机の引き出しにしまつたはずだ。引き出しを全部探したが、無い。「盗られた」と私は思つた。

「先生をたたいてやる。わたしが、先生をたたいてやつから」
体が大きく、一番後ろの席にいたT子は、怒つたような顔をして、つかつかとめがけて進んで来る。二年一組三十二名の児童は、どうなることかとたずを飲んでT子を見守つた。

「私が悪いのだ。どのようにたたかれようと甘んじて受けよう」と、私は静かにT子を待つた。

今から数年前のことである。ことの

体験学習

橋 本 賢 司



「Aさんは、毎朝、自分で弁当を作つて、持つてくるんだつてね」「そうです。今は、兄の分まで作つています」

これは、芋煮会にいく途中での、中学生の女子生徒との会話の一部である。彼女は、地元が誘致した会社の

社長の長女である。中学生になると同時に、始めたそうだ。彼女の兄さんも、そうしたらしい。たかが弁当ぐらいと思う方がおられるかもしれないが、毎朝、兄の分まで作る中学生が何人いるだろうか。

彼女との会話で、七年ほど前に、